

フランちゃんを虐待するのです

雷之電



# 目次

おもちゃなんて呼ばれた日	1
お節介などと、	10
破滅のプロローグ	13
誰ぞ、聖なる真実は	18



おもちゃなんて呼ばれた日

目を開ける。鉄格子で四方を囲まれた4畳ほどの狭い檻、その外は……無限に続くタイル地。ここへどうやって来たのか、また来る前に何をしていたのかすらも思い出せない。気絶する直前の記憶は飛ぶことが多いのでそれだろう。

檻の外、何も無い地面にひとつの扉が現れる。木枠に板を嵌めただけのような簡素なものだ。

「おお、目が覚めたか」

扉から男性が出てくる。いや入ってくる、か？見た感じ25歳ぐらいの、健康的な体つき。歯ごたえがあり味もいので、このような者を食事の際に好んでリクエストしていた。

鉄格子を開け、フランドール自身の、なんと呼ぶべきか……パーソナルスペースにずかずかと踏み入ってきた。

それにさっそく嫌悪感を抱き後ずさる。

「君は何も知らなくていい。ここへ連れてこられた経緯も、俺が何者かも。ただ俺のおもちゃにさえなってくれば、殺しはしないよ」

落ち着き払い話す様子がなんとも気持ち悪い。

男に殴りかかるが、片手でいとも簡単に拳を止められてしまう。強靱な肉体も含め、吸血鬼としての能力などは奪われているようだった。

「おもちゃ」

いきなりこちらの衣服を剥がしにかかる。乱暴な手つき先の先に見えた眼差しは、完全に色欲と嗜虐心に支配されていた。

「やめて、何のつもり!? こんなことお姉さまに知れたらどうなるかわかつてる?!」

「おもちゃのクセにうるさいな、反抗せず、ただ啼いてくれればいい」

相手の吐く歪んだセリフの中に苛立ちの波が見え隠れする。それを悟り、抵抗をやめた。

身ぐるみ剥がされ、これから受けるであろう穢れの数々を想像し震える。そうこうしている間に、男も下を脱ぎ準備を終わらせていた。

郷へ来て初めて相對する、生きた男のそれは、彼女の体とは釣り合わないほど太く巨大であった。

状況を呑み込みみる前に、男がフランドールの腰を後ろから押さえる。

「え、待つてお願い！そんなのいきなり入るわけ——」

意に反し二人の腰が容赦なく密接する。前戯なしにどうなるか、簡単に予想がついた。

「い、たい……つくう………む、無理、だつてば……—」

血がにじむ。見た目10才前後の彼女の器のキャパシティを完全に超えていた。強烈すぎる信号が一気に流れ込んだせいで、頭も限界だった。

「さすがに浅いなっ……もつと入つてくれなきや」

「え、どういう……っぎいー」

もう入りきつたと思つていた。もういっばいだつた。なのにまだ押し込もうとしてくる。

「……!!!」

この責め苦から逃れようと必死に身をよじるが、相手は大の大人、簡単に抜けられるはずもない。結局、この嫌悪、痛み、恐怖にひたすら堪えるよりほかはなかった。

「……ふう」

いくつもの体液が混ざつた深紅の粘液が、自身の股から流れ出る。一方的な欲望を強引に押しつけられ続けた結果、フランは完全に生気を奪われていた。事後の虚無感がつけ入る隙もなく、意識を保つのに精一杯で、ヒューヒューとただ浅い呼吸を繰り返すばかり。

「お前の血で俺のモノが汚れたんだからきれいにしろよ、……反応がないな、さすがにやり過ぎたか？」

肉体を極限まで蹂躪していた矛を彼女の眼前に持つてくると、頭を鷲掴みし、むりやり口に押し込んだ。

「んむっ！」

複数の不快極まりない臭いと味、感触が襲う。頭を離そうとするも、男がそれを許さない。呼吸を試すたび汚れた液体が鼻腔を占拠する。

「ツがは、はあ……は……」

あらゆる体液でできた不浄極まる 水たまりの中心で。

それをまるで死体でも見るような目で一瞥し男は出ていった。

「ぎ、咲夜さん、これ……」

美鈴が手渡したのは一枚の写真。今朝、門の前で見つけたという。

「……え、これって」

写真に映る少女。まさしく、一昨日散歩へ出かけたあと消息を絶ったフランドール・スカレットであった。

シンプルな鉄格子の内側で倒れる彼女。無造作に打ち捨てられた衣服や映る身体の具合からして――

「なんて事……ああ、妹様……」

「これ、お嬢様に伝えたいほうが……わずかな進展、とだけ言っておきましようか」

「ええ、そうして……写真は私が持つているわ」

妹の惨状を知ればレミリアの精神状態すら危ない。

しかしこの写真一枚では、フランドールの居場所を知る大きな手がかりにはなり得ない。それどころか生死すら判断しかねるような状態である。

もし生きていれば、今この瞬間にもまた何かされているかもしれないのだ、一刻も早く彼女を見つけ出す必要がある。

牢から出され、あの扉の向こう、男の家の二階部分にいた。外へ通じる場所は結界で封鎖されているので、逃げられそうもない。

畳にちやぶ台、至ってシンプル。一階に水場がある。

「いちいちあの部屋に行くのも面倒だから出した。逃げようなんて考えるなよ、結界に触れようもんなら、歳の数だけ炒り豆食わせるからな」

なんとなく居心地悪そうにしていると、外から数人の男の声が近づいてきた。

「ああ、今日は俺の他に二人の相手も頼むよ。なに、昨日みたいな無理はさせないから大丈夫」

「――え、今日も……?」

昨日の傷が治りきっていない。こんなコンディションで三人もの相手なんかしようものならただじゃ済まないだろう。

「その……、昨日のがまだ痛むの。だから――」

「主人にたてつくのか？コトが済んだら一晩水牢行きな」

白い顔がさらに蒼白になっていく。吸血鬼に流水は大敵、ましてや乱暴されたあとに何時間も……

「お、いらつしやい。早速始めよう」

へたり込む彼女をよそに、三人は紅いドレスをなんの躊躇もなく脱がしていく。

抵抗すれば地獄をみる。男たちの言うことは絶対なのだ。自分という存在を押し殺し、ただ目の前の客人をもてなすのみ

地下には水路があるようだ。水路に突き落とされ、底からのびる縄で足首を固定される。おそらく冷たい冬の水路にも着けず立たされるのは、流水に弱くはない人間でも堪えるだろう。

「……やっぱ無理、あんなことされた後だもん……死んじゃうよ」

蚊の鳴くような声で恐る恐る抗議する。もちろん罰則覚悟で、それだけこれは無理があった。

「様子くらい見に来てやるから安心して気絶しな。こっちはあんたが死にさえしなければいいんだから」

「あ、行かないで——」

嘆願も虚しく、男は道を引き返し姿を消した。

「……………」

想像を絶する速さで体力が削られていく。ものの五分で立っているのがやつとになってしまった。

あれだけのことをされたのに、男に助けを求めてしまう。

パチユリーの本に書かれていた「ストックホルム症候群」ってやつだろうか。

とうとう脚に力が入らなくなり、全身が身を裂くような冷たい流水に浸かる。水面に顔を出すだけの体力もなく、そのまま意識を失った。

囲炉裏の傍、なんとか生きているようだ。この後にどんな仕打ちを受けようと、今この瞬間に生を確認できただけで満足



だった。

同じく囲炉裏の傍で座りながら作業をしていた男が振り向く。睨むような、興味なさそうな、よくわからない眼差しを受け困る。期待を裏切るような言動は死に直結するのだから、迂闊に発言もできないのだ。

しかし男は何もしてこなかった。視線を自分の手元へ戻し、もとの作業へ戻っていた。

とにかく休むなら今しかない。今何かされたら間違いない生きては帰れないだろう。それに、疲れからくるこの強烈な睡魔に勝てる自信もなかった。

毎晩届く血みどろの写真たち。

これらをレミリアが見つける前に門前から回収し咲夜に渡すのが美鈴の仕事だった。

「……、これです」

「ありがとう……仕舞っておくわ」

あまりに残虐でとても直視できたものではないが、この写真の中にフランドールの居場所を割り出すなにかが写っている可能性を信じ全て咲夜のタンスに保存されていた。

今日もそのはずだった。

「咲夜……これ、なに？」

主が問い詰める。

しかし返す言葉が見つからない。

「どうしてこんなものが、貴女の部屋から出てくるのかしら？」

体液に塗れ放心状態で倒れ込む妹の写真。

男たちに囲まれ肢体を貪られる妹の写真。

真冬の水路に立ち、ただ耐える妹の写真。

すべて彼女の手中にあった。  
すべて彼女の眼中にあった。

.....

すべて男の、手中にあった。

後ろ手に縛られアイマスクで正座、背中目掛けて熱湯がぶち撒けられる。

「つつつつつつあああああああ!!!」  
のたうち回る。そこへ追い打ち。

彼の趣向は、本来の性処理ではなく加虐へ傾いていた。

度重なる極端に強力な信号により、いま自分がどんな感覚を味わっているのかよくわからない。

意識は遠くなり、また熱湯で取り戻す。

吸血鬼ゆえの異常な精神力が、この時ばかりは仇となった。

自分の身体が今どうなっているのか、もはや検討もつかない。知りたいとも思わない。ただこの数百年で一番の苦痛を受けていることだけは、文字通り痛いほどわかった。

血と熱で嗅覚も効かない。まともに残された感覚は聴覚くらいで、それすら自身の絶叫と喘ぎをただ拾うのみとなっている。

「お疲れさん」

そんな声を聞いた気がした。

空耳だったかもしれない。

しかしそれにすぎる他なく、今度こそ安堵し、氣絶したのか泥のように眠ったのか、そこで記憶は終わっていた。

目覚めたら見ず知らずの男たちに囲まれている。

その後は主人の嗜虐心を満たすのみ。

翌日には何事もなかったように、いつもの透き通るような肌が下衆共を迎える準備をする。  
こんな生き地獄が幾度となく繰り返されたあと、救いの手と呼ぶべき変化が訪れた。

いつもは主人の家のどこか冷たい床で目を覚ます。けれども今日は、二度と満喫することはないとすら思っていた、分厚い布団にくるまれている。

これは……

どういった風の吹きまわしか？

それにこの布団といい部屋といい、主人の匂いが微塵も感じられない。それにあの汚い獣の息遣いも聞こえてこなかった。代わりに、日本の商人特有の、線香と酔を混ぜたような匂いが漂ってくる。きつとそんな人が近くにいるんだろう。

起床を悟られたらまた何をされるかわからない。布団から少しだけ顔を出しあたりを探ることにした。

こたつに半身を突っ込んで黙々となにか書いている小太りの男。さらに隣では火鉢まで焚いている。

煩雑に調理道具が並べられた台所や無造作に干されている衣類などを見るに、どうも独り身らしい。

男がゆっくりと振り返る。たつたそれだけの動作を警戒し一気に緊張が高まるが、こちらを確認した彼が発した言葉は、そんな緊張とは一切無縁にも思える、間の抜けたものだった。

「おはよう……よく眠れたかな」

上目遣いに睨むこちらの心境を知ってか知らずか、なお落ち着き話す。

「ここにいる間、十分に休むといい。彼のことは忘れなさい」

「もう、いないの？」

「いや、いる。僕はあいつから、君を『借りて』いるんだよ。契約した時間だけ、君の面倒をここで見られる。無力な商人の、

悪あがきさ」

とすると、こちらの様子を確認したうえで同情、少しでもあの男から離すべく契約した、ということだろうか？

「あの男から、これを飲ませるようにと。あんた、只者じゃないね」

渡された湯呑みに注がれていたのは、飲み慣れた紅茶などではなく、熱めの血液だった。久々の食事だが、あの男の指示となると怪しい。しかしどこからどう見てもただの温かい血なので、一気に飲み干した。

「――、ふあ」

なんだろう、この妙な安心感。何百年も昔に忘れたと思っていたこの感覚。

もう顔も覚えていない、父に似た雰囲気だった。

これを感じると途端に強い睡魔にかかる。今回もその例に漏れず、彼の胸に背中を預け、静かに寝息をたて始めた。それを離さじと抱き締め誓う。

必ずや、この子を元いた場所へ帰してやると。

「時間だよ、旦那さん」

「ん、ああ……わかった。契約は破れないものな」

自分を信頼しここに眠る少女を、この外道に渡す。

「時間外は俺のものだ。どうしても欲しけりゃ全額払うんだな」

この後彼女がどんな目に遭うか容易に想像できる。それだけに、胸が傷んだ。自分までこやつが悪行に加担しているという自覚もあつた。

しかしどうにもできないのだ。

「んじゃ、また明日」

あの時間が帰ってきた。今日は主人ひとり、主人のやりたい放題というわけだ。こいつは人数が少ないときほど酷い扱いをしてくる。自分が人間だったら何度も死んでいるだろう。

自分がいま何を食らっているのか正確にはわかりかねるが、男のモノを限界まで喉に押し込まれながらオーバーサイズの張型で秘所を無理矢理掘げられているらしい。

羞恥心とかは、ない。

ただその瞬間を生きるのに精一杯で。

激痛に悶えながら、氣道を確保するのに精一杯で。

感情なんて入る余地はなかった。

「ツガ、ハ……」

なんの前触れもなく口へ吐き出される精液を捨ててはならない。呑み込まなければ。彼はできるまでやらせる。

「ありや、鼻から出ちゃった。やり直し」

「ご、ごめんなさい……でもわざとじゃ——」

髪を鷲掴みし睨みつける。

「誰が主人に口答えして良いつつつた？」

張型を抜きそこに挿入される。ついでに両腕で思いきり首を締められた。もはや一切の抵抗も認められない。

このまま死んでしまえばどれほど楽だろう。

毎晩思った。

吸血鬼の不死身性を存分に発揮しながら吸血鬼の尊厳を踏みにじられている今、私は一体なにになったんだろう。

ぼんやりと。

恐怖で萎縮したちつぽけな脳は考える。

## お節介などと、

翌日、散々もてあそばされたあとそのまま商人の家へ引き渡される。全身からにじむ血液もそのままに。

「この子……まだ、生きてるのか。あんた、とんでもないモノに手を出したな」

「こいつと遊べるんなら、殺されたって一向に構わん。こんな上物、初めてだ」

まだ息がある、それだけだった。何もかも吸い尽くされ、今この腕の中にいる。なんの反応もせず、なんの抵抗もせず。吸血鬼としての彼女は、すでに死んでいるのかもしれない。ただ、ここにいるだけ。

全身の汚れを洗い流すと、あちこちに開いていた傷口はすべて塞がっていた。その間も、彼女の身体に力が入ることはなく、ただこちらの所作に身を委ねるばかりであった。

そして昨日したように、厚い布団にくるんで完成。ついでに本来の色なのか血の色なのかわからなくなっていたドレスも洗濯しておいた。

ずっと一人での生活を送っていたため、日中、家に誰かいるとどうも落ち着かない。商売はすべて別の棟で行っていたが、どうしても吸血鬼のことが気になって集中できなかつた。

夕方になって帰っても、布団の形は変わらぬまま。寝返りすらうたず滾々と眠り続けている。

「んん……」

モソモソと動き始めた。布団の端から顔が出てくる。昨日と同じ状況であることを確認すると、顔を出したまま、また眠り始めた。

ひとまずの安堵なのか、それとも動かない事態への諦念か。

あいつを殺せるだけの力が自分にあれば、こんなことも考えず、この子を救ってやれたのに。ただの商人が、裏の人間に歯がたつわけがない。

「貴様か、妹様か、妹様にあの様な仕打ちをよくもー」

「何も無い、文字通り虚空から現れたメイド服の女は、こちらに無限の殺意を込めた細いナイフを突き立て、叫ぶ。『待て、俺じゃない。むしろ逆だ。俺があの子を奴から遠ざけてるんだ』」

震える切っ先。少しでも対応を間違えれば、辺りは血の海となるだろう。

「奴……誰、誰がこんな写真を」

「写真？この子の写真か？」

困憊した表情で取り出したのは、きつとあの男が趣味で撮影したであろう、横で眠る吸血鬼が嬲られている最中を収めた写真の数々であった。

「とりあえず妹様は連れて帰るわ。協力ありがとう」

「待て、あんたにこの子を引き渡したなんてあいつに知れたら俺がどうなるかわからない……他人事なのはわかってるが」

感情の昂ぶりで今はそれどころじゃなさそうだ。この二人がどういった関係なのかはわからないが、とにかく大事な方らしく、状況のわからないまま居場所を掴んでしまい焦っているのがひと目でわかった。

先程の殺意とは打って変わって、今度はひたすら焦っていた。

「その……妹様の容態は、どうなのかしら？それ如何によつては今すぐあなたの安全を確保できる保証は無いわ」

「外傷はすっかり治ってる。ただ、気力のほうはわからないな、何日もあんな目に遭わされていたわけだし」

抱きかかえ、去り際に振り返る。

「まずは妹様を紅魔館へ連れて帰る。また戻るわ」

この時の、いやこれから先の咲夜にも、見ず知らずの他人の安全を確保する気など毛頭なかった。目の前のことに精一杯で周りなど見えていないのだ。

相対時間フェムトで紅魔館亭主の部屋にたどり着く。

「お嬢様……妹様を」

レミリアが力なく駆け寄る。ここ数日、妹のことどころくに眠れていなかった。いても立つてもいられず、日傘を持ち寝食も忘れて人里を奔走していたのだ。

「……ひとまず寝かせるわ。私に運ばせて。それで、犯人は殺したの？」

「いえ……見つけてすらいらないのです」

「それじゃあ、フランには見張りもなく、一人だったってこと？」

「男が……商人が一人、妹様を匿う形で」

レミリアが大きくため息をつく。

「その男を何故連れてこなかったの……ただの商人が、吸血鬼を弄ぶような奴に太刀打ちできるわけ無いでしょう。そいつは紐付きよ」

相手の戦力は完全に未知数、下手に動けば痛い目に遭うのは明白だった。

しかし一人、目撃者ならいるではないか。



## 破滅のプロローグ

しかし遅かった。あの商人は死んでいた。縦に薄く、一寸もない厚さにまでスライスされ、囲炉裏を囲むように並べられていた。腹部の厚み、今となつては幅、から彼であることはわかる。

いつもは「こう」する側だから、ビジュアルにおののくことはなかったが、別の故にてひどく動揺していた。早すぎる。相対時間フェムトで行つて戻る間に、やつはその移動を察知し、ここまで器用に人を解体してしまつた。

「あつ」

あつ、だ。時間でいえばまさにフェムト、点だつた。時間に精通する彼女でさえ、感知するので精一杯、点ゆえ長さはゼロ、しかし確かに存在する、点。点の時間だけ、男の気配を感知していた。

何か、何かが、自分の首と重なつた。座標を同じくした。点の時間重なつた。鋭く冷たい何かが。

点の時間、零時間。零時間重なつた。これがもし線になつたら、零を超える時間重なつたら、為す術なく首は落ちる。今更死など恐れようか。落ち着け、考えろ、現れる時間が点となる現象……

待て、本当にそれは点なのか？ 須臾など感知のしようがない。となると……

膝をついてあたりを見回す。薄くなつた商人の遺体のほかに異様なところはない。薄い……面？

「なるほど、そういうことね」

時間に関わる能力を得るにあたつて、昨夜は時間と空間について、当時知られていた事実や仮説を手当たり次第にかき集めていた。そして知つたのがブレーン宇宙論、宇宙は三次元よりも上の次元を持つ空間を漂っている、という説だ。

低次元の空間と物体が高次元方向から重なるとき、その時間は点となることがある。数直線上の点同士が動き重なるイメージだ。これは線と点、面と線、面と点、立体と……と拡張して考えることができる。

そしてなぜ重なる時間が点、零であるにもかかわらず、それを感知できたのか。これはすぐに答えを出すことができた。

これもあくまで仮説だが、数ある素粒子の中でも万有引力を媒介する重力子が、三よりも上の次元へも行き来できるのではないかと言われる。水の波が面を通るように、高次元からの万有引力が三次元の空間に響くのだ。近づけばより強う力を感じられる。

つまるところ、奴は高次元を移動して、まさに神出鬼没で三次元空間にかかわる。そしてそれは万有引力から感知可能ということだ。

「……、」

わずかな引力の揺れ、存在の証左も漏らさず感じ反応する必要がある。人の引力を分析するなどやったためしがない。確かに存在した。他のどんな力よりも弱い万有引力の、そのわずかな揺れが。

「つは、はあ、はあ、」

高次元方向からの刃が首を刎る直前で大きくのけぞり、姿を現すその点で時間を止めた。

彼女自身ですら、できるなんて思わなかった。やるしかなかった。それは奇跡と呼ぶに足る神業だった。

男は顎が外れんばかりの驚愕の表情で宙に浮いている。ようやくの対面にしかし心動かされることもなく、めいっばいの憎悪を込めて縄で縛る。

体を検める。何の形ともつかぬ、爆発をそのまま止めて固めたような、拳程度の大きさの何かを見つけた。何でできているのかもわからないし、なぜか咲夜はそれを運ぶことができなかった。これがこのふざけた能力を与えたアーティファクトとみて間違いないだろう。

懐からアーティファクトを出し時間を進める。

「……そうか、負けたのか」

「ばかね。時空の知識量で負けるわけないでしょう」

「あの子を好き放題できたんだ、これから何をされても文句は言うまい……そうだ、四次元からあんたを見てたんだが、あんた、下着のセンスは皆無だな。それと、脳に動脈瘤ができてる。そうカツカすんなよ」

我々が絵画を見るように、高次元からは三次元空間の、文字通りに全容を見ることができると道行く人々の、骨の髄までまじまじと覗き見られるのだ。

罪人の戯言に耳を貸してやる必要もない。また時を止め、アーティファクトと一緒に館へ連行した。

「お嬢様、とにかく…… あいつに近づいてはなりません。我々の能力はすべて把握されています。相手に手札を明かして賭けるなんて自殺行為です」

「…そうね、その喩えで言えば、貴女はジョーカー、いやルールを無視できる手札を持った子を、知っていると思うのだけれど。」

自分が展開した嘘えにもかかわらず、咲夜はその返答を理解しかねていた。

「まあいいわ。図書館へ行つてくるから、戻るまでに拷問部屋を一つ片付けておいて頂戴」

「…ねえ、こあ」

まる一日食事もせず本を読み漁るパチュリーにせめてと泥のようなスムージー、通称「悪魔の完全食」を運んだ小悪魔を、彼女は呼び止めた。

「どうされました？あつもしかして魂くれますか？」

「ええ、まあそういうことになるわね。契約を結んでほしい奴がいるの」

「なんだあ、私めが愚かしくも、貴方様の魂を欲し奉りますことを、ご存知でしょうに！」

「はいはい、死んだら馬車馬の如く働いてやるわよ。職種は選べるのよね？……じゃなくて、こっちは来なさい」

一人で向かったのは、血糊が落とされた大小様々な鉄製の道具、椅子が整然と並べられた地下牢の一つだった。

「おつ！拷問ですね！遊んだら魂までくださるんですか！」

「ええ。死後の魂を支配してほしいの。フランを攫ったあの男よ。ただし、まだ死なせないようにね」

あの男は紅魔館の面子を持つ能力を徹底的に調べ上げていた。妖怪を生け捕りにして売りさばいていたようだから、たとえ彼が人間だといっても、練ったであろう策は無視できない。きつとあのふざけた次元転移の他に何か隠しているに違いはない。少なくとも紅い月を砕くほどの驚異を孕んでいる。

しかしそれは、現世に縛られ、三次元の網にへばりついて暮らす者に限った話である。現世の理など異界の者には通じない。というので異界たる西洋地獄の住人として小悪魔にこの件を頼むことにした。

彼女は能力を公にしていない。悪魔であることから推察できることはパチュリーと、図書館に数万ある本のうち数冊にか載っていない。

いざとなれば肉体を捨てられる。現世に持つそれなど、現世で活動するための依代でしかなく、そこから抜け出したあとは現世のいかなる手段を用いようと、縛り付けることはできない。

そして彼の死後、彼女に魂を従わせてしまえば彼の仇を完全に封じられる、といった魂胆だった。

「それじゃ、契約できたら教えて」

鈍い突起が無数に並んだ椅子に、男は縛り付けられていた。その周りをてくてく歩きながら呟く。

「この写真は何？ ああ、すごいことやってんじゃん……ねえ、楽しかった？ 私も舐めてみたかったなあ、あの子の血」

男の肩にもたれかかる。

「私、貴方に嫉妬してるの。あの愛らしい体を独り占めした貴方に……これが、あの子を仕留めた槍？」

沸き立ったやかんの湯を男の股に注ぎ込む。

「おもちやって、ただ啼いていればいいんでしょ？」

貴方ならもう勘づいてると思うけれど、私は悪魔。あの紫色の魔女との契約で、あいつに仕えてる。あいつの意向で、あなたはここから生きて出られないし、死んだ後は私が面倒を見てあげなきゃいけないの。……死ぬことはどうにもできないとして、もし死後、強力な力を得られるとしたら……

貴方は選ばなきゃいけない。ここで緩慢な死を迎えて東洋の奈落で罪を贖うか、さっさと死んで私のもとで力を手にするか。

汝一切の望みを捨てよ……まさかその望みを、人間の貴方が捨てることになるなんて、ダンテも知らなかったでしょうね。……契約成立ね。ひと思いに殺してあげる。

「……フラン？」

部屋に真綿が散乱している。いつもは物を壊したらその都度罰として食事を抜いてきたが、こんな時だから、何も咎められない。平生、罰すると半日はいじけるばかりだったから、このやり方は間違っているのかもしれない。

彼女のうずくまる棺の中は血でベタベタに汚れていた。連れ帰ってからのというもの、激しい自傷を止められないでいる。頭蓋を派手に割ったままびくりとも動かない時さえあった。

妖精たちは怖がって誰も寄り付かない。咲夜は弱音ひとつ吐かず献身的に世話をしてくれてはいるが、当惑しやつれているのは、誰が見ても明らかだった。

フランはしばらく一睡もできないでいた。喚き暴れるばかりで何も語ってはくれない。今は泣き疲れたのか、じつと黙っ

て棺の壁を見つめている。

「ついできてほしいのだけど……動かないなら担いでいくわよ」

結局担ぐことになった。米の小袋でも運ぶように、右肩に腹を乗せる。

その足取りはひどく重かった。あの男を、フラン自身の手で死なせ、彼の存在を直接否定させることで、未だ引きずる恐怖を消してしまおうという算段だが、彼に会わせることは彼女に多大な負担を強いことになる。

こんな時ほど妙に早く着いてしまうものだ。五体満足、六体不満足ともいえる男の牢に。

「準備はできています。さあこれを」

下ろしたフランに、小悪魔が歌うように話しかけ銀のナイフを手渡そうとする。しかしフランは応えない。

息を殺し、立ったまま動かない彼女の背中を押し、一緒に歩き出した。しかし男に近づくにつれ彼女は重心を後ろに移す。接近の拒否を必死に示しているように感ぜられ、レミリアは心臓を握り潰されるようだった。

「大丈夫。気を確かに持ちなさい」

男の目がフランの歩みを牽制した。傾いた駒がついに倒れるように、腰を抜かしてしまった。

「さあ持つて」

ナイフの柄を強引に掴ませたフランの手を外側からレミリアの手が包みリードする。彼女はそれを頑なに拒む。

「やめてお願い、やだ、あ、ああ」

——やめろ。自分こそ本意じゃない。

もはやフランの手とナイフを握ってレミリアが刺さんとすると言った方が適切かもしれない。手を前に進めるほど、焼け石でも食わされるようなフランの表情が、レミリアの胸をずたずたに切り裂いた。

心臓を潰し、胸を裂いてまで強行されるこの「儀式」は、しかし突然に終わりを迎えた。

「……お嬢様。いくらなんでもあんまりでしょう」

ナイフは何の前触れもなく姿を消し、引き換えに現れた咲夜が二人をむりやりに引き剥がした。心臓も胸もとうに塵となったフランをひしと抱きしめ、吐き捨てるように投げた言葉だった。

「咲夜。どういうつもり」

「主とて容認できません。実の妹になんて仕打ちを！」

ついにレミリアと目も合わせず、咲夜は人形にするようにフランを抱き込んで牢を出ていった。

## 誰ぞ、聖なる真実は

たかだか十歳児程度の脳ミソに狂疾の治療など任せるべきではなかった。まさかあんなことになるなんて。何をするか聞いてさえいれば……

無尽蔵に湧いて出る自責の念に溺れつつ、フランを元の部屋へ運び込んだ。

「……ひどい失態です。前もって止めるべきでした」

どうするでもなくただ汚れた棺の中に横たわる彼女に、無意識に語りかけていた。

「お姉様と同じ。私のことなんかちつとも考えないで、独りよがり全部仕切ろうとして。省みるべきはそこじゃないの」  
体を起こしていた。咲夜の目を見据え、笑いも怒りもせず、淡々と、彼女は答えた。

「傲慢なやつばかり。誰も私自身なんか見てないんだもの」

何も、何も反応できなかった。この短い間に血を吸い尽くされ、骨まで抜かれたような気分でした。

「まあいいわ、パチエが外で聴き耳立ててる。行つてあげて」

部屋の外で立っていたパチユリーが、話があるとかで、咲夜を図書館へ連れ込んだ。テーブルに用意された紅茶はすでに冷めていて、わずかに埃すら浮いている。

「紅茶なんか飲めなくなるだろうから、先に冷ましておいたわよ。……どうしたの、夢にでも迷ったような顔して」

「……聞いていたでしょうに」

「そうね。全部聞いてた。でも貴方、事実を突きつけられたくらいで狼狽えるような人じゃないわ」

パチユリーは答えを知っている。知つたうえで問答を仕掛けている。それくらいは咲夜にもわかった。

「わからないんです。わからなくなつたんです、何もかも。妹様がいきなり正気に戻つたようで」

「正気……人と話ができるような状態ではなかったのにいきなり口を開いたことなら、あれがあの子のペースなのよ。それも含めて、その「何もかも」を説明するわ。レミイがやったことから全て、こうなるのは必然だったのよ」

姉妹がワラキアにいた頃。母親は早くに蒸発して、父親と小さな城で暮らしてた。レミイは長子として目一杯可愛がられ

ていたのだけど、癩癩持ちだった妹は「Frantic doll（狂った人形）」なんて呼ばれて、地下室から出ることを、それにレミイはそこへ降りることを許されていなかったの。

そう言われれば入ってみたくなるのは当然。何年か経って、父の外出中はいつもかかっているはずの扉の鍵が開いていた。後長い螺旋階段を降りた先にあったのは、正座を前に倒した姿勢で樽を背負った、自分と同じくらいの大サイズの人形だったの。

「初めそれをフランドールと認識することはできなかった。姉妹そろった髪の色は抜けて、蝙蝠の羽根は得体の知れない軸ときれいな寶石に取り替えられていたからね。

樽と拘束を解くとフランは言ったの。「もとに戻して、お父様に叱られる」って。

数年ぶりの再開で、潰れた肺から必死に絞り出した言葉がそれだった。

数日後帰った父は、レミイの犯した禁忌を知っていた。フランにしていることを全て話した。隠すことでもなかったように。

・自分の趣味通りの美しさを彼女に与えた

・近辺の貴族や吸血鬼に地下室と彼女を貸し出している

・劣情をそれと認識したことはなく、一重に愛である。彼女もそう信じめいっぱいの愛を享受している

愛について熱弁する父を理解できなかった。

フランの手で殺させることにして、紆余曲折あれどそれは成功した。

苦勞したのはフランの洗脳を解くことだった。正しいと思う愛を説こうたって、自分が知るのも父からの、親らしい愛だけだったから。

「その経験から、今回も同じような手でかたをつけようと焦ってた。仇討ちなんてそう何度もすることじゃないから……数少ない成功体験にすぎるほかなかったのよ」

ひと呼吸置いて、また口を開く。

「今回は、どうして失敗したと思う？」

「えと……すいません。その、話を飲み込みきれなくて。失敗……妹様の殺意が欠けていたんだと思います」

「まさに。殺意なんて持てるはずがなかった。今更、だからどうってわけでもないけれど。話の着地点を見失っちゃった……」

とにかく、レミイを責めてはほられないのよ」

話を無理やり着地、いや不時着させたところでパチュリーは咲夜を図書館からさっさと追い出した。二つのティーカップに浮く埃は、終始穏やかに漂っていた。

そこへ小悪魔が寄って言うに、男の処刑を完遂したと。

「それとパチュリー様。変なこと聞きますね、仮に明日死ぬとわかったら、今日は何します？」

「そうねえ……あなたのその依り代を好きにさせてもらおうかしら。私が死んだらずっとこき使うんでしょう？ 本当は足りないくらいよ」

「なっははは！ いいですね！ カタツムリみたいにおとなしいパチュリー様が、どんな趣味を展開するのやら！」

もちもちに笑う顔を正面からパチュリーの顔に押しつけ、もちもちしながら言葉を繋ぐ。

「いつそ今日やったっていいんですよ？」

フランは自室にレミリアを招いていた。ベッドの前に置かれた質素な一人用の机に一つだけ、血のたまったティーカップが置かれている。フランはベッドの上に座りレミリアはそちらを向いて背もたれのない椅子に。

「それ、お姉様に。頑張って用意したのよ」

レミリアは大変に居心地が悪かった。あんなことをされてすぐ、フラン本人が直接、あの乱心が嘘のように冷静に、この部屋へ連れ込んだのだから、今ここで殺されても仕方ないと本気で思っていた。この血に聖水の一滴でも入っていようと受け入れる。その気でした。

「こうも部屋が血生臭くちや、せつかくの香りもわからないわね……!？」

その血が唇に触れる。しかし口に通すことはできない。

「デジャヴユっていうのよね？……別に変なものを入れてないわ」

聖水でも、香辛料でも、きな粉でも、銀イオンでもない。

「もしお姉様が独りよがりの信条に任せて、お父様から私を引き離しさえしなければ……私が飢えを知ることなかったのに」

ティーカップに注がれていたのはフラン自身の血だった。



「飲まないの？あなたはまだ……飲めないの？」  
唇を離す。

「まだ認めないのね。あの日、お姉様のために流した血を、素直に飲み干していれば——」  
紅い唇を震わせ答える。

「……わ、わからないのよ。私は、ああすればあなたが、”しあわせ”になれるだろうって、信じて疑わなかった。サーカスに生まれた虎みたいに……外を知らないで、あいつにいいようにされてるのを見過ごせるわけじゃないでしょう」

「——もう長くないの。あいつが来てる。嘘でもいい、飲んでくれたら、もう一度、もう一度だけ——」  
もう長くない。真意はわからないが彼女は嘘などついたことがなかった。そう育てられた。

「つつつつはあーさ、もう一度！」

もう一度、フランは抱擁を受け止めた。彼女の人生でたった二度目の、長女式の愛に満ちたそれは、何百年残した対の凝りが融け合うほどに温かかった。

「……はあ、ふう」

椅子に縛られた小悪魔は、みぞおちに深々と刺さるナイフをじつと見つめていた。この身体を好きにしたいと語ったパチュリーは結局、喘息で変に動けないとかで、いわば静的に責めることを選んだのだ。そして今、たった一本ナイフを刺して、横で弱のを待っている。

何年ぶりであろうこの感覚、体の芯から冷えていく体温と逆に高揚する気分を、当の本人も愉しんでいた。

「しぶといわね。もう日付も変わった」

パチュリーがナイフの柄を掴み、いけるところまで一気に下ろす。

「私みたいなただの人間風情が長く変わらずつ生きてるとね、嗜好がめちやくちやになつてくるのよ」

腹に開いた大口に右手首を突っ込んだ。

「すーい、これがあなたの脈拍ね」

未だ生命滾る大動脈と握手する。腕を伝い来る彼女の興奮は痛みか愉しみか、もはやわからない。いや彼女に二つの区別はないのかもしれない。

叫ぶ口は微笑み緩んでいた。変わらず生き、めちやくちやになった嗜好と照らし合わせても、この極端なマゾヒズムは到底理解できない。替えの体があるところも余裕が幅を効かせるようになるのか。

「……待つて。えつ、どういう、……消えた」  
握手が緩む。

「レミィと、フランの……」

パチュリーは随分前から、フランとの遊びが発端で、二人の拍動を常に監視していた。ついさつきまで恐ろしく早く刻まれていたリズムが、二人同時に、

「こあ。何をしたの」

「はは、ばれちやいました？……ほら。状況を思い出して……今日がその、*「仮の明日」*でしたよね？」  
とつさに手を引つ込める。

「……うそ。そんなつもりじゃ」

「忘れてませんか？私、悪魔なんですよ。と同時に、第五の封印を解く子羊であつたようですよ！」

いつの間にかこの拷問部屋の入り口に、処刑したあの男が、自身の背丈ほどもある大きな斧を片手に持ち立っていた。彼は死んだ。これは小悪魔がわざわざ地獄から呼び戻した彼だった。

「ど、どういう……ねえこあ」

「死後の魂の処理まで、命令は受けてませんでしたよね？私、気づいちやつたんです。あなたとの契約外にいる存在なら、私に代わってさつきとあなたを死なせられるんじゃないかって」

死者を生者がどうこうすることはできない。もはやパチュリーになせる術はない。

「い、今、命令する。あいつを止め——」

「そりゃ無理です。あなたが死ぬまで彼の魂は縛れない。そう契約しました。さあ！」  
声高らかに、麗らかに。私が見たのは、祭壇の下だった。

「フランちゃんを虐待するのです」

小説ID : 189008

雷之電

Generated by ハーメルン